

新型コロナウイルスに負けない防犯強化活動

NPO 公益活動支援事業(補助金)

■団体名:NPO 法人

K-9 First Aid Security Team

■事業年度:令和3年度



団体の概要

私達は警戒犬と共に地域社会を守る救護・防犯のプロフェッショナル集団です。

災害、事故、犯罪等のいざという時に活躍出来る人材の育成、犯罪等を未然に防ぐためのパトロール活動等を行っています。

この活動を通して今以上に人々が安心して暮らせる社会を目指します。

事業の目的と概要

私達は少しでも犯罪に巻き込まれる被害者を減らすために、防犯活動に従事しています。

しかし昨今新型コロナウイルス感染拡大に伴い、地域の防犯パトロール活動が自粛の傾向にあります。

そこで私達が地域の方々に代わり防犯パトロールを実施し、少しでも被害者を減らすための活動を実施しました。

事業費とその主な内容

事業費 77,335 円(うち補助金額 35,000 円)

旅費・交通費

事業の成果

私達は地域の方々に代わり下記地区にて防犯パトロールを実施しました。

八幡東区枝光地区周辺

八幡西区黒崎

八幡西区光貞台、浅川学園台周辺

八幡西区城山公園

八幡西区三ツ頭一丁目、二丁目

八幡西区東曲里町周辺

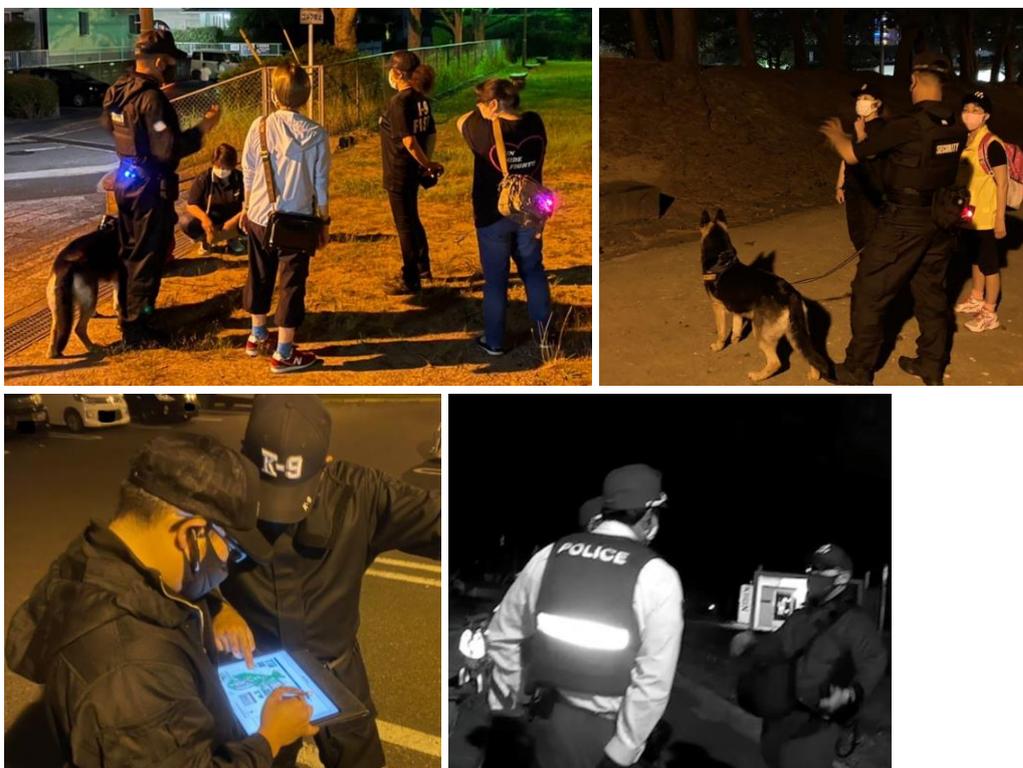
八幡西区浅川日の峰二丁目

地域の方と一緒に防犯パトロールを実施することもあり、その中で防犯知識について情報提供、実技指導をすることで地域の防犯に対する自助力向上へつなげることが出来ました。

防犯パトロールの場所は事案が発生した場所等防犯パトロールの必要があると判断した場所を選んでいましたが、中には動物への置き餌や不法投棄、治安への不安を地域住民の方より相談を受けて防犯パトロールを強化した場所もあります。

防犯パトロール中に事案等が発生した際には、その都度関係各所へ報告・連絡・相談して対応してまいりました。

この事業を行ったことで置き餌についての看板設置や公然猥褻等案件の減少等一定の効果が見られました。しかしまだ解決まではいたっておらず、今後も長期的な経過観察・防犯パトロールの継続が必要です。



事業をふりかえって(工夫した点や苦勞した点、今後の展開など)

前述した通り、各地区で見られる防犯上の問題点は解決まで長期的に取り組む必要があります。今後も防犯パトロールを継続していく必要があります。

令和4年度は、そのための人員確保・人材育成に力を入れ団体のレベルアップを図るとともに、現在実施している学生ボランティアの受け入れの継続と子供や大人向けの防犯教室の企画・開催の継続をしていくことで地域の自助力向上のサポートを行っていきたいと思います。

SDGS だれもとりのこさない「おでかけあそけん」

①あかちゃんひろば

②体験ミニフードパントリー事業

NPO 公益活動支援事業(補助金)

■団体名:

特定非営利活動法人あそびとまなび研究所

■事業年度:令和3年度



団体の概要

子どものあそびと学びにかかわる実践と調査・研究を通して、子育て環境の改善を図ることにより、子どもと親の健やかな育ちとまちづくりを応援することを目的とする団体です。

自然と触れ合う親子の活動、0歳からの環境教育、親支援活動、子どもの人権に関する学習支援、子どもの居場所・あそび場づくり、子ども食堂、学習支援、寺子屋運営などを行っています。学校でも習い事でも家庭でもない、4番目の居場所、それが“あそけん(ASOKEN)”です。

2001年ひびきのの開発開始と同時に入植した親子を中心に、地域にねざす当事者による親子での活動を継続しています。18年経ち、市内最大のマンモス小学校を抱え、未だ沢山の子育て家庭の流入の続くひびきの。数年後には、日本最大の小学校区となる学術研究都市ひびきのを拠点に、市内全域に提案、発信を行います。

事業の目的と概要

コロナで壊滅的な「ご近所と一緒に子育て」の小さな集い場を、市内各所に出前活動します。コロナ休校やリモート授業などで、子育て家庭の困難度は日に日に増しています。誰も経験したことのない、コロナ時代の子育てを、明るくみんな協力しながら乗り切る工夫を一緒に考える集い場活動です。各地域に活動を出前していきます。

虐待件数は増え、虐待死は0歳児が最も多い、という現実に対して「ご近所のできることをまずやってみる」ことを、体験的に伝えます。

与えるのではなく、参加して、ともに作っていくことを伝えます。

事業費とその主な内容

事業費 483,402 円 (うち補助金額 210,000円)

①あかちゃんひろば(ベーマッサージ体験やよみきかせ、保健士や助産師によるあかちゃんミニ子育て講座)

②体験ミニフードパントリー(もったいないをみんなでシェアして、食品ロスを減らそう)

活動日数 20 日。のべ参加数 合計 281 人 大人 170 人 子ども 151 人

活動会場は公共施設などがコロナで閉鎖となったため、活動可能な会場として、お寺の御堂、グリーンパーク、玄海青年の家に、コムシティ市民活動サポートセンターなどにもお出かけした。ほとんどの期間、コロナで制限が続き、主にひびきのキャンパス内の屋外を活用し、期間中活動を継続した。密を避け、完全予約制。

活動の際に、体験ミニフードパントリーを行い、フードロスについてのミニ学習会を行った。同時にひびきので定例実施している食品配布や学習支援活動、おもちゃ図書館活動などについてお知らせした。

③HP、パンフレット、新聞などによる発信。啓発展示活動。

市内各地において情報展示の実施。市民活動サポートセンター、ひびきの図書館展示(常設)、カーニバルひびきの店、若松区役所、子育てふれあいルーム、近隣保育所、小学校など。一部ポスティング実施。こども食堂活動会場@クレカ若松、ひびきの base、コムシティ、西日本展示場、など。

随時、学生たちも含むボランティアスタッフへの活動指導、支援。研修実施。

事業の成果

コロナ禍にあって、公的な乳幼児の集い場がほとんど閉鎖となる中、活動を継続し続けることができたことが何よりの成果でした。コロナ禍にあって、新しい赤ちゃんを産み育てる勇気あるお母さんたちにたくさん出会うことができました。子どもたちは、仲間の中で育ちます。閉じ込め育児は非常に危険なのです。

親子連れで安心して出かける場所がほとんどない中、ゆったりと過ごしてもらい安全な空間を設け、子どもたちの育ちにとって、閉じた親子関係は危険であることを、活動を通じて理解していただけたと思う。保護者支援も含めて子供達を日々見守る取り組みは、学校が閉じており、地域社会との関わりも希薄なコロナ禍において、これから一層継続されるべきであると感じます。





ほとんど屋外での活動。お寺で焼き芋体験を行った。赤ちゃんたちは生まれて初めての焼き芋会。

コロナが少し落ち着いて、ひびきのの施設を借りられるようになり、寒さを凌具ことができたが、子供達は外へ出たがるので、お散歩も楽しんだ。

事業をふりかえって(工夫した点や苦勞した点、今後の展開など)

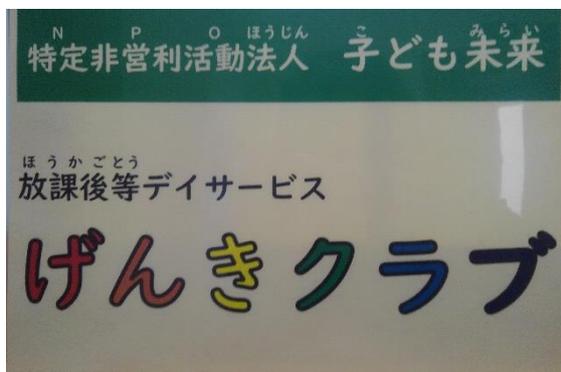
子どもは、仮想では育ちません。子どもは一人で育ててはいけません。暮らしも出会いも、実際の人とのやり取りの中でこそ、成立します。コロナ禍にあって、寒い冬も、ずっと主に屋外で活動し続けました。一部ひびきので、FAISの施設が一般開放されてからは、屋外と、室内を両方使用して活動しました。子ども達同士の出会いの場として、親にとっても安心して安全、地域の生活情報や、子育てのちょっとした話題など、対面で過ごしながらやりとりできるひときは非常に貴重なものでした。小さなユニットが地域に生まれて育っていくことを願っています。残存する子ども達の集い場や機会を再生させながら、それぞれの地域において、子どもの育ちに必須な仲間とのあそびやまなび、実際の暮らしの中での親子の学びのあり方について、体験を通じて学び、考える機会を物理的に、拡散させていきたいです。

障害児がコロナ禍における新生活様式を 身につけるための 小規模施設ならではのマンツーマン指導事業

NPO 公益活動支援事業（補助金）

■団体名：NPO 法人 子ども未来

■事業年度：令和 3 年度



団体の概要

平成25年より放課後等デイサービス事業所げんきクラブにて障害児支援を行っている。小規模である事を活かし、子どもたち一人ひとりの成長に合わせたマンツーマンでの関わり・指導を行っている。

事業の目的と概要

施設の設定が充実していることはもちろん良いことではあるが、それ故に職員から保護者へのアドバイスが家庭の環境を考慮していないものになっていたり、利用者数が多い施設だからこそ【流れ】で成功している対応を伝えられたり、保護者にとって現実的・具体的でないと感じられるという意見を多く耳にする。ワクチン接種が進んでも時間と共に効果が薄れるなど、新型コロナウイルスとの共存生活の方法は手探りが続く中、如何に「やらされている」「怒られてばかり」という負の経験とならずに体験しながら身につけさせることが出来るか、これらの課題に取り組んでいく。

事業費とその主な内容

事業費 107,007 円（うち補助金額 53,000 円）

マスクやハンドソープ、手拭きペーパー等の衛生用品を中心に子どもたちへの指導に使用する用具の作成費用などに使用する。

事業の成果

自分の目でマスクの予備がたくさんある事を確認出来、【失敗はしたけど新しいものに変えれば大丈夫。次の時に気を付けよう】と気持ちに余裕が出ます。失敗後でも気持ちに余裕がある事でイライラする頻度も減り、他の活動に集中出来ました。

人との距離の取り方も何度も繰り返し練習しました。
視覚的に見えるように物を使ったり、手を伸ばしてみても届かない距離を体験したりと
様々な試行錯誤を行いました。

子ども達のワクチン接種の疑似体験・練習として子ども達と一緒に接種会場を作りました。遊びの一環として体験することで接種の不安を少し減らせたのではないかと
思っています。実際に「少し体が強張っていたけど接種中に泣くことはありませんでした。」
「会場に行ってもパニックはありませんでした。」と保護者様からご報告も頂きました。



事業をふりかえって(工夫した点や苦勞した点、今後の展開など)

感染予防のため体温測定が必要です。学校や大きな施設ではサーモグラフィーなど
による検温がほとんどですが、飲食店などでは非接触タイプの体温計が多いかと思
います。

児童によっては自分の額に人が手を持っていくことで怖がったりする場合もあ
ります。

今後も非接触タイプによる検温を継続することで他の場面でも不安感が和らげば
と考えています。

また、ソーシャルディスタンスについても今後もまだまだ気を付けなければならない
と思います。もともと人との適切な距離を保つのが特性として難しい子どももいます
ので、継続して指導を行っていきます。